

光  
土  
齋  
藤  
澗

911.168-Sa256ㄗ



1200500755738

911.168

256

X  
複  
写



始

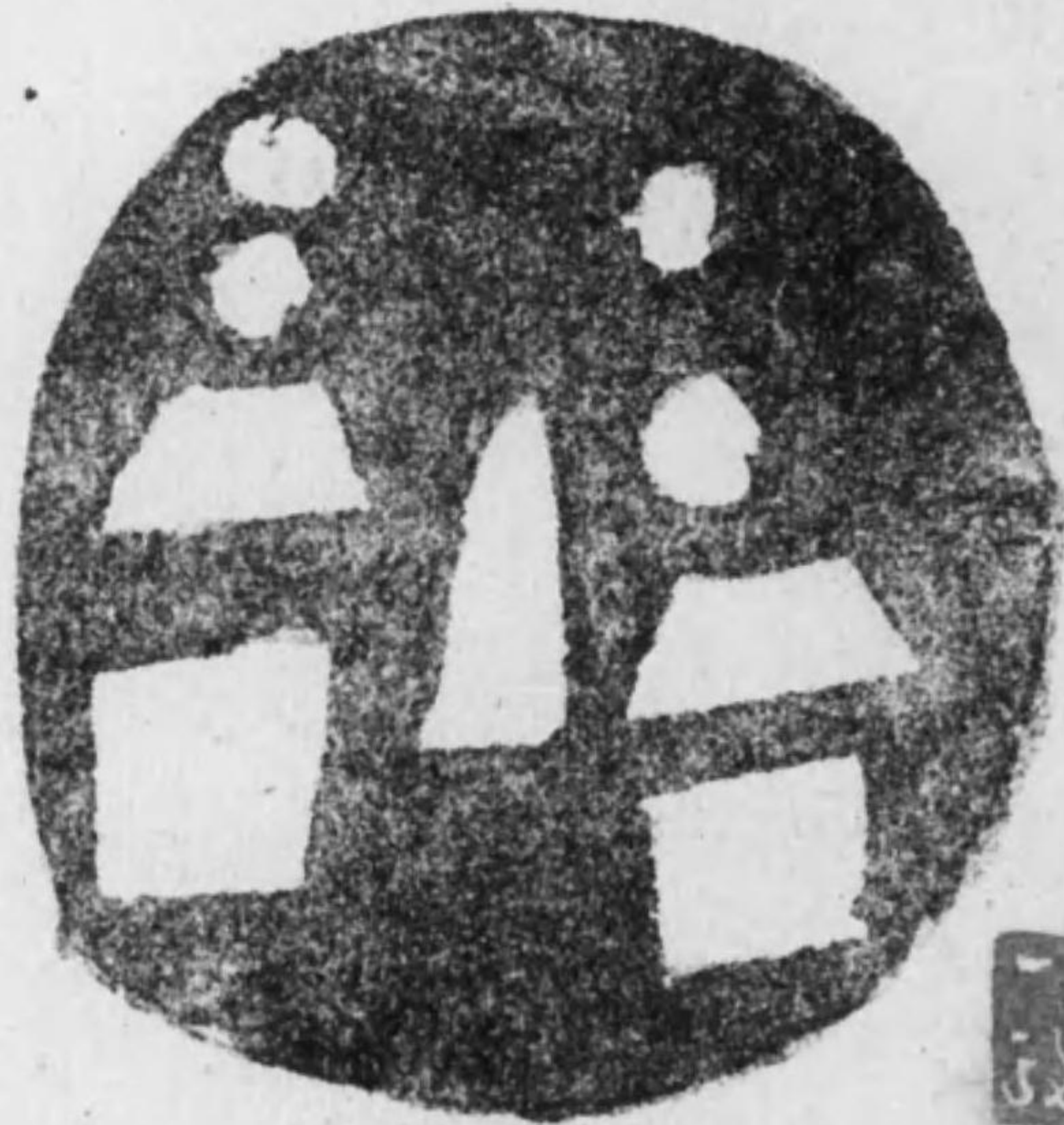


14

14

911.168

SA256



982  
131

光

土

齋  
藤  
瀏



生にほこり 死にほこり  
現身のわが尊  
さを行き徹してむ

昭和二十年九月

著者

起き上り小法師

起き上り小法師起き上りたり起きあがる時に  
くるりと背を向けにけり

起き上り小法師起き上りそこねころがれりこ  
ろがりつつもなほすまし居り

起き上り小法師ころぶとしつつころびきらず  
ひよつこり起きて我を見すゑし

起き上り小法師起き上りきちんと坐りたり何  
でもなきがにすまして居るも

起き上り小法師起き上る力あまればかまた倒  
れたり起き上る方向むかひに

起き上り小法師坐りさだむる見つつ居り我も  
からだ體をゆりて居りたり

ゆりゆりし體かためてついと坐る起き上り小  
法師は怒れる如し

## 浪

聲あげてここの荒磯に打ちをよれ干潮の浪の  
力こもらず

さし來る潮にのりつつ塵芥ちりあかた河おしのぼる捨て  
しその町に

ひた押されやむにやまれぬ浪かこれ打ちを碎  
くる聲のさびしき

五百羅漢

大方の羅漢首あらずありと見れば他の羅漢の首をのせ居り(熊本縣巖殿山にて)

嚴めしく身構へて居れこの羅漢笑へる首をのせられて居る

拾ひたる首をつなげばこはこれにわれを脅す羅漢とはなれり

むらぎもの心丹田に落ち居るや五百羅漢は首なしに静か

墓

這ひやめて身構ふる見れば墓の姿勢體からだにつきて確かなりけり  
大き獲物のみ込まむとして眼をつぶれ墓の姿勢はくづれざりけり



吞み込みし獲物大きに過ぎにけむ墓眼をつぶりあけてまたつぶる  
 大き獲物のみ込みし墓の手をあげて眼をぬぐひたり苦しかりけむ

### 動物園

大き熊の體ゆりゆる不器用さ見つつし居りて物やりたくなる

憚ること憚らず爲し檻の猿は類ごしにわれの顔を窺ふ

檻の内の獅子高吼ゆれ鳥けだものその存在を認めぬ如し

### 人の藝獸の藝

活くる道の安きに墮ちし猛獸のなれの果なる藝をわが見つ

藝ならぬ藝を敢てしこの獅子のいつより物を  
貫ふ覚えし

藝終へし獸に代り禮言ふと人はおのれの世辭  
いひにけり

おのれに代りて人の禮言ふ間をもつともらし  
く猿控へ居り

張り終へし綱ゆれて居り渡る子は囃し出され  
て渡らむとすも

渡り來て綱の真中にゆらるる子ゆられながら  
に片足立ちすや

片足たまに立たんとしつつ揺れて居る綱の上の子  
を囃は煽る

### 蟻地獄

お堂にはみ佛いまし縁下には蟻地獄をりてと  
もに寂けき

み堂には燈火しづかにとりむりここに蟻地  
獄の蟻を陥せる

蟻地獄先を見きはめ居るものかとらへし蟻の  
狂へど冷静いっか

高瀬川

勢にかられて水は瀬の岩にながるるままの衝ぶつ  
突つをする

岩一つ越ゆるはずみにわかれたる水は異なる  
瀬に落ち行けり  
衝きあたり碎くる水におしかぶさりやすく  
岩を越ゆる水あり

蟬と蜘蛛

まこと死をのがるる術か蜘蛛の巢に翅はねふるの  
みなり大き蟬これ

かかりたる蟬からみ終へて徐ろに蜘蛛はひそ  
めり見極めにけむ  
技のなき蟬にむかひてこの蜘蛛の智慧もてあ  
そぶが耐へられなくに

産土神に詣づ

信濃國北安曇群七貴村の村社八幡宮はわ  
が産土神なり

古い母のおはな輝あかりいたみ姉ときてこれの神杉の樹脂  
もらひにき

輝あかりにこの神杉の樹脂をぬり稻刈り耐へしみ母  
いまなし

神司つね居守らねばこの宮を今の兒童も遊び  
場とすや

神庭にいたづら悪戯をして遊びしが歸るときにはみな  
拜みにき

産土神に何を願ひし覚えねど相撲とりしは今も記憶す

この土俵にすつてんころりと吾が負けしを友も知り居り語り出づれば

燕

餌をせがみ雛の燕がさしのべし喉が巢にみゆいくつもの喉が

あき得るだけ大きくあけし嘴は親のとび来る方向に並べり

ひたすらに餌を乞ふ雛は體中嘴となり大きくは開く

木耳

木耳も己はたもつぶよぶよにふにやふにやにありて己は保つ

人と獸

人間が立ちて歩むを覚えし時あさ笑ひけむ友  
の獸は

干潟

岩窟にこのひく潮の残るを知り遊びつつけて  
居る小魚かも

時またば潮のさし來る疑はず静もる貝かも殻  
乾きたり

船蟲のふためき逃ぐるをこがまし人に獲らる  
る柄にもあらぬに

烏賊

へらへらと烏賊は泳げり腰の邊に眼またこの在りと  
言ふはわるきか

振る太刀の電光のごと身をかはせりふらふら  
と居しふらふら烏賊が

頭つかふまでもあらじと烏賊どもは尻泳ぎす  
や常生活すには

深山の森林中に火を焚きつゝ

このままに眠りも入らば我が生命夜の深山の  
木に吸はるべし

知らぬ間に化生となりて深山の夜の木の間に  
火を焚く我か

深山の夜のしづみに壓されつつ思邪なしと頼  
みわが居り

蓑 蟲

蓑の中にまつたく隠れみの蟲は不安なからむ  
か外を見ざるも

防ぎ得ぬ危険を見るに堪へざればみの養蟲の  
中にやこもる

みのもろ共つぶさるべしと知らざらむみの蟲  
衰をたのみて居るも

吠ゆる犬

板扉の中にて吠ゆる犬ありて裾の隙間より時  
にのぞけり

儲翼もつをし願へ持ちて居らば魚鳥の族にい  
れられてあらむ

自らを大きくもなし小さくもする怒と知りて  
怒るはよろし

天に唾す

天に唾してこの憤懣の消ぬべくば吾は唾せむ  
よろこびをもて



わが心われを忿怒にかりたてつつ笑顔せよ笑顔せよとひそかに勸む

憤るわれに耐へよと諭しつつわが心また卑怯と叫ぶ

### 無疑の寂しさ

われ深く吾を疑ふことなくて生命いくるを時に寂しむ

### 忘自悪他

よろよろと石に躓くそのさまを道に映せる月を悪むや

### 自他混淆

わが聲に應じつつ人の踴れるを耳しひし人の解くや面白

二日月

大空に照りも敢へなく沈みたる二日の月を云  
ひて歎かず

ありわびて光りつつまじき月ゆゑに沈むを惜  
しむ吾とつげなむ

黒部溪谷行

電車より人は來りてこの溪の山川の相を淺し  
と歎く

発電所多く持てるを誇らむか荒れたる溪を寂  
しみて來て

深山の峽を流るる河にしてあわただし一時の  
雨に濁れり

わが席をうばひし人は思はざる俄の雨に術な  
く濡れつ (電車に側壁なし)

電車にて傘をさしたるこの溪を戀ひ思ふらむ  
か來難く老いては

釣橋を渡るかと我に問ひたるはわれの齡に近  
き人なり (錦繡温泉)

溪の家の空け放たれし二階の間泊りたく見つ  
友も云ひたり

深山のただ一軒の旅舎はたごやの焼くるままやけし様  
は目に見ゆ (鐘釣温泉)

一つ家に繪はがき賣りて少女居り藪にらみさ  
へよしとわが見つ

露天温泉あふに浸れる人を見る人の多きことさへ  
寂しきに似つ

### 残雪を憐む

消え後れ眞夏を谷の石灰石くわいせきとまがへる雪をあ  
はれがるかも (黒部溪谷にて)

溪底になだれ落ちたる時よりや消え後るべく  
なりし雪かも

消え後れ眞夏の谷にある雪の落す雫もなくて  
減りつつ

なだれ落ちし雪一かさを谷に置き山は眞夏の  
茂りをつくす

冷たさを疑ふわれや消えのこる眞夏の雪に面  
寄せむとす

忘れし煙草

半ば吸ひて置き忘れたる巻煙草ほそくしづけ  
く煙たて居し

他人はひとわれは吾とし決めつつもよしとし  
思ひあしとしも思ふ

海濱月夜

砂原に松の幹々方向そるへ投影をならぶる月の夜を來し

高松の葉瀟しの月光に映ひつつ踏みやはらかし砂丘の道

濱風の遊ぶ木末にある月光の斜にこぼるる幹の間歩む

まつ人のありていそぎて砂山をみくびりしかばふみまよひつる

松の間ゆもるる燈火を待つ人の居る家と思ひ  
美しみつも

厳しくも生き來しことのありがたしこの休  
息の吾を許せり

生き居し驚き

生命ながく生きて居しかば死にしとき人驚け  
り生き居しことに

惜しなるる時に死に得で忘れしころに死ぬとも悔なくあらめ

蠟の灯

蠟の灯は明るく燃えて足らへるや生命灯して消えゆくものを

ほの暗く長くともると一時に燃えて明りて消ゆといづれぞ

明き燈をあかしと思はず消えしときその眞暗きに驚きにけり

現身を曝す

現身の透きて照るがに魂澄めば寝ねたるままに掌は合すかも

身をまたく眞日に曝してすがすがし或は寂しと人の見らめど

まづしかるわれの相すがたもかくさねば照り徹るべし  
天つみ光

死を尊ぶ

大君の賜へる御魂みたまけがすなく返しまつらむ死にを尊たみ

照り顯つ如く

しづけて時に櫻のそよ風に照り顯つ如くも  
の言ふはよき

悲しき證明

生きて居ることの證明あかしに言はでもの物言ふべ  
くはかなしがるべし

散る牡丹花

美しく大きく咲けば牡丹花はそのよるこびを  
もちて散るらむ

四〇

老を歎く

働きて足ると思はねど老われや疲れて早く寝  
に就く日あり

奢に似る

山の上に一日の遊びせしことも今に思へば奢  
にぞ似る

獨生獨死

死にも生きもわが獨りなり行くときめ爲すと  
きめにし清明<sup>すが</sup>しさは今も

怒



私の怒うしなひわがあるは寂しき生いぢと言はば  
言ふべき

巨濤の天打つなして怒り得ば面白くあらむ怒  
り死ぬとも

下關の迫戸

迫戸越ゆと勢ひて波に立つ潮の哀れなれども  
清しかりけり

海うみの潮碎けて迫戸を越ゆるなり願もつものは  
哀れなるかな

天なるや月はまとまる暇なき迫戸の荒瀬の影  
をなげくか

生死行徹

生にほこり死にほこりて現身のわが尊さを行  
き徹してむ

皇國のみ民の矜持まかなしみ生死をかけて今日までは來つ

火を噴く山

蓄へてしづもる山やおもほえば火を噴く山は  
搦りやすきか

朋友

腹をやむ吾に食さすと温泉の宿の火鉢に友は  
白粥を煮る (上の山温泉にて)

歌の友のわが背ながすに甘えをり雪どけぬく  
き夜の温泉に

湯上りの炬燵に友と對ひ居て足れるが如し共  
に黙せる

温泉の宿にその夜惚け居り苛烈なる戦争説き  
しは遙けきごとく

### 葛温泉

葛温泉は信濃國北安曇郡大町西方の山中  
にあり

父母が米味噌もちて來し温泉ぞ今は騒ぎて人  
の遊べる

父母がきくとほめつるここの温泉を古稀近く  
して我は浴みつる

父母があみし温泉なればひとりつつおのづか  
らわが長湯するかも

### 高瀬川溪谷

繁山の谷の岩群荒ければ月の光は射しとがる  
かも (夜望)

河原にみだるる石の大きくて水は見えねど音  
にたぎちたり

月に照る岩群かげの闇ふかしときに光るはた  
ぎつ水かも

岩群を傳ひて來れば根にたぎつ水ありて鋭し  
渡りかねつも (晝行)

湍つ瀬に架けて渡ると流れ木を友となへば  
樂しき如し

荒石の河原行きぬく目途たたね日の高ければ  
樂しくもある

子連れ熊よく來て遊ぶ岩と聞きわが坐り居て  
ほほゑましかり

低きに就く性質の一つにこの水も遂には海に  
入ると思はむ

史を讀む

八重棚雲道別きに道別き天降りてし大き御幸  
を史は誌せる

光なき土

光なき土とし謂ふや草に木にかがよふ花はさ  
かしめにつつ

大地をやしなふ水の隈おかず瀾漫れども音に  
はたたじか

國の名を負ひて生くれば草かげの私人と思ひ  
捨てじな

魂は持つ

現身の動きなづまば捨つるともなほ生きとほ  
す魂はわが持つ

力なくばただに在るさへ否まるるこの現實は  
蟲けらも知らむ

落ちきたる槌の眞下に身を置きて恐れぬ人は  
嘲はれてよし

## 糠星

おのがじし照るに足らへる糠星を今宵かなしく  
仰ぎ見にけり

## かもかくも

生き生きて大きく國に生きぬかむわが現身は  
かもかくもなれ

## 後記

本集は私の近年の作歌とそれからそれ以前の作中から私の所信にかなつたものとを収録したものである。この舊作は既に私の出版した歌集にあるものだが、現下の國勢下に在つて、更めて讀んで貰いたいと思つたからである。これからの吾等の短歌に就いて何か示唆する所があるなら幸である。

裝幀 中川一政

昭和二十年十一月十五日印刷  
昭和二十年十一月二十日發行

● 定價一圓五十錢 (稅共)

著者 齋藤 淵

東京都杉並區阿佐ヶ谷三ノ五一

發行者 中村 梧一郎

東京都神田區錦町三ノ一

印刷者 大同印刷株式會社

代表者 井關好彦

(東京三三)

光 土

東京都杉並區阿佐ヶ谷三ノ五一

發行所 株式會社 八雲書店

電話 東京三六二五  
郵管 東京二一一二

982  
131

新日本歌集

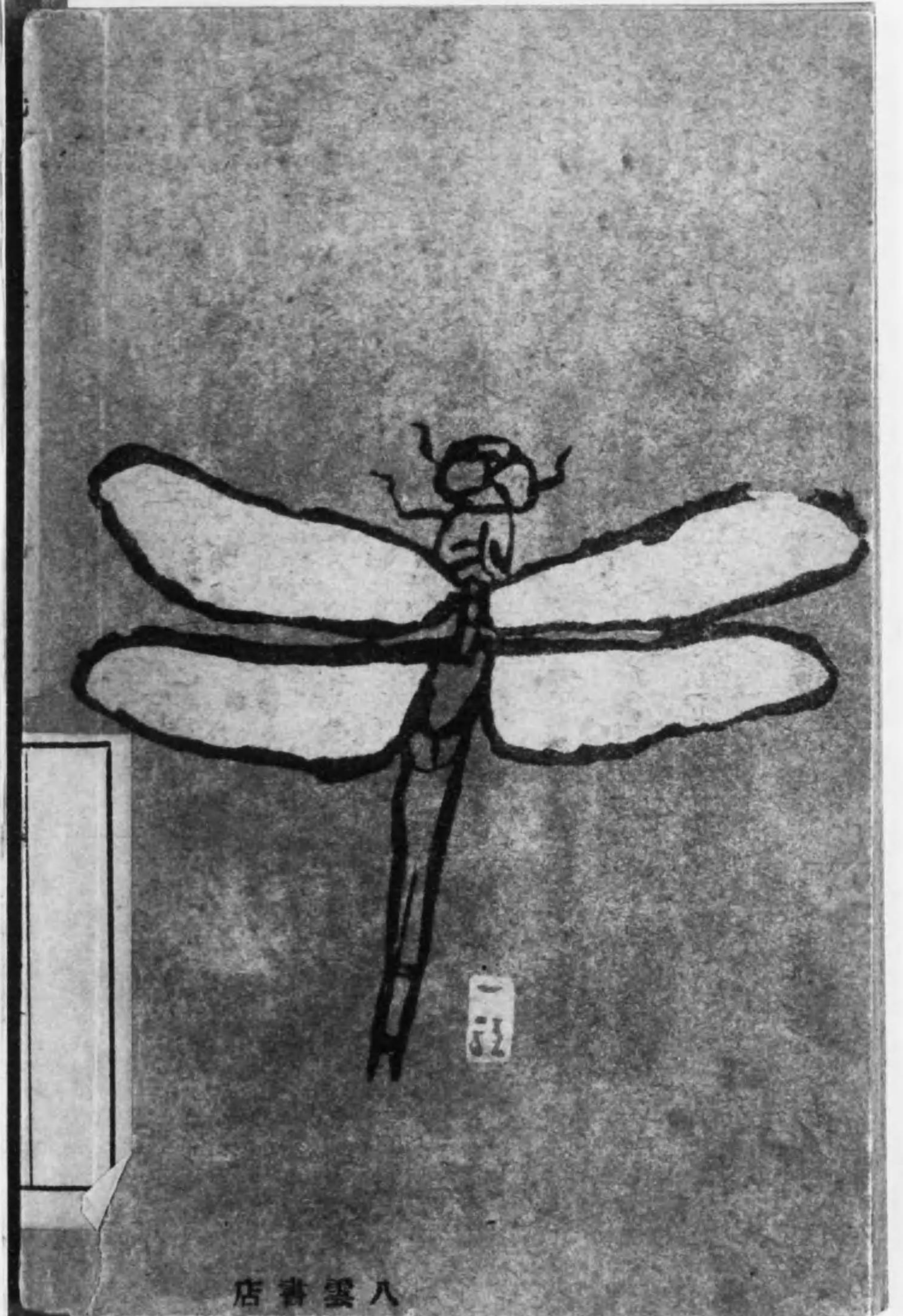
川吉土吉 川吉土吉  
 田井岐善 田井岐善  
 順勇鷹 順勇鷹  
 夕陽居歌 夕陽居歌  
 抄泥晴粉 抄泥晴粉  
 鳴明土鐵 鳴明土鐵  
 端定根 端定根  
 の花 未大未の

新日本歌集一川中・夏四六判6A

各册定價一圓十五錢



終



八雲書店